H23-3-21
東京
（第3種郵便物認可）

こちら特

どうする原発行政　作家・広瀬 隆氏に聞く

まず止めて総点検

地震に無防備「浜岡」も危ない

反原発のバイブルともなった「東京に原発を！」。あれから三十年後、米国スリーマイルアイランド原発事故と危険レベルが同等の惨事となった福島第一原発。作家の広瀬隆さん(六八)は昨年、十五年ぶりに原発に関する本を出版。その中で地震と津波の被害で日本の原発が危機にさらされることを予測し、今回の事故を「人災」と語る。三割の電力を賄う原発行政はどこに向かうべきなのか。

（秦淳哉、鈴木伸幸）

「事故後に炉心溶融が起こりそうになった時、必ず水素爆発は起きると思った。爆発が分かっているのに誰も指摘できない。事故後に対応すべき人が原子炉を理解せず、計算できない集団だったことは驚きだ」

東京都内の自宅で、広瀬氏は福島第一原発事故への対応から話す。

広瀬氏は一九七九年、スリーマイルアイランド原発事故を機に原発の取材を始め、問題点や危険性を世に問うてきた。

原発事故は炉心溶融から放射性物質が放出される事態となり、八十キロ圏内の住民が被ばく。それでも水素爆発を食い止めることには成功した。

「私は原子力関係者を批判する立場だが、爆発を回避させた米国の計算能力は高く評価している。日本ではそれができずに爆発させてしまった。最優先の電源確保も今ごろやっている。国力を挙げての対応が遅い」

政府は「ただちに健康に影響するレベルではない」としているが、福島県の原乳や茨城県のホウレンソウからは規制値を超す放射能が検出された。原発敷地内で働く作業員らの被ばく量も一〇〇ミリシーベルトを超えている。

「とにかく被ばく量を最小限に抑えてほしいのが今の心境。今回の事故が実証したのは、危惧していたことが起これば、すべての原発が福島原発と同じ状態になる可能性があるということだ」

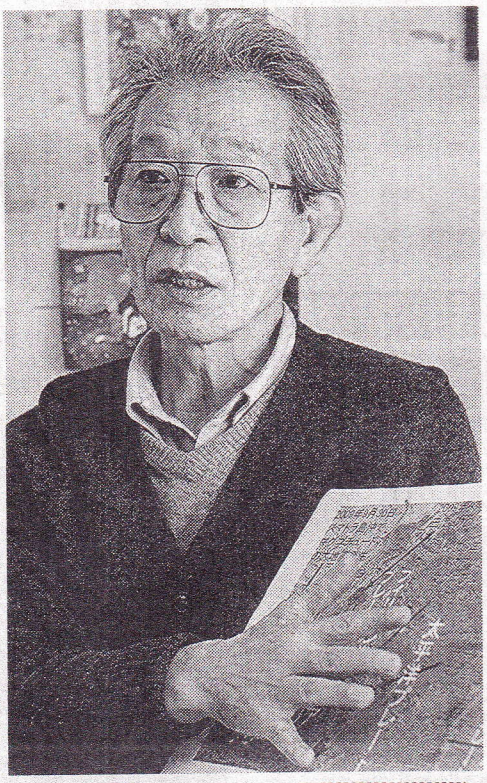
広瀬氏が憂慮する理由は、仮に長い時間をかけて福島第一原発の状態が沈静化しても、日本が地震から逃れることは今後もできないためだ。

そうした地震に無防備な原発への危機感から昨年八月、著書「原子炉時限爆弾」を出版したという。「太平洋プレートの動きが活発化している。今後も日本周辺で大地震が続く可能性もある」

だが、経済界からは早くも原発の危険性を忘れたかのような発言が飛び出している。

日本経団連の米倉弘昌会長は十六日、記者から「日本の原子力政策は曲がり角か」と問われ「そうは思いません。今回は千年に一度の津波だ。（地震に）あれほど耐えているのは素晴らしい」と強調。見直しの必要性について「ないと思う。自信を持つべきだと思う」と述べた。

「全然分かってない」と広瀬氏は言う。「『千年に一度』と言われるが、実際に被害を大きくしたのは津波。百年余り前の一八九六年に起きた明治三陸地震でも、岩手県沿岸の綾里で三十八メートル、田老でも十四メートルを記録した。決して『想定外』ではなかったはずだ。素人の私でも予測できるのに、対策を取っていないのは『人災』だ」



ひろせ・たかし　1943年、東京生まれ。65年、早稲田大学理工学部卒業。大手メーカーの技術者を経て執筆活動へ。81年の著書「東京に原発を！」は「安全ならば送電コストがかからない首都圏に建設しては」とのアンチテーゼを掲げて話題に。著書に「資本主義崩壊の首謀者たち」など。

デスクメモ

言葉は少々乱暴だが再び「ヒバク国」となった日本。今度は自分たちの手で福島原発周辺の大地を放射線物質で汚し、多くの人が風向きにおびえる。これからも原発依存でいくのか、それともエネルギー政策を見直し「貧しく」も安全な暮らしを選ぶのか。国民一人ひとりに突き付けられていると思う。（呂）